

◇名和昆虫博物館のご紹介

(1) 名和昆虫博物館の創設者の名和靖氏の紹介と創設の経緯 (現館長の名和哲夫会員は5代目です)、意義、その後の歴史

名和靖は、岐阜県本巣郡(現在の瑞穂市)の庄屋の孫として生まれ、幼いころより、農家の人々の害虫に対する苦勞を見聞きするうちに、害虫駆除のための研究の必要性を感じ、名和昆虫研究所を独力で設立しました。その啓蒙普及のための附属施設として、名和昆虫博物館が建てられ、靖亡き後、2代目梅吉、3代目正男、4代目秀雄と引き継ぎ、現在に至ります。

(2) 板倉聖宣前学会会長との出会い、その後の関係、今回の講演との関係 (名和哲夫会員は仮説実験授業研究会の会員で、出会いは中学時代)

僕は、中学1年のとき、板倉聖宣氏の提唱した「仮説実験授業」を受け、体が震えるような感動を味わったことがきっかけで、科学者になりたいと願うようになりました。同氏との出会いは、仮説実験授業を通じてということになります。その後、仮説実験授業研究会などでたびたびお会いするうちに、「名和昆虫博物館のお金の流れを調べてくれないか。」という課題を与えられたことがきっかけで名和昆虫博物館に出入りするようになりました。その後、博物館の仕事に忙殺され、板倉氏からの課題を果たせずにいたのですが、2年ほど前に課題を解くべく決算書などを見ることができ、報告しようとしたときには、板倉氏は病床の身で、その後報告の機会を失ってしまったので、会長をされていた科学史学会でその続編を報告しようと思い、入会し、この講演にいたりしました。

※上記項目(1)、(2)はさらに詳細な解説があります。[\(詳細解説\)](#)

(3) 名和靖の「ギフチョウ」の発見と生態、環境対応

名和靖の名は、ギフチョウの発見者として有名ですが、靖自身は、この発見に関してそれほど重大なこととは考えていませんでした。生涯、害虫駆除のための研究に重きをおいていたので、その活動を続けることの方に重大な意義を感じていたようです。とは言っても、「動物学雑誌」に投稿した「岐阜蝶ノ實驗」(明治22年[1889年])は、それまでのギフチョウ発見の経緯と生態を詳しく報告しており、靖の初期の重要な論文といえることから、特別な存在であることに

は違いはありません。ちなみに、ギフチョウの食草を発見したのは、後に2代目館長となる名和梅吉です。

(4) 昆虫採集と教育の関係

「百聞は一見に如かず」とはよく言われ、まだその続きがあることは知っていますが、僕の体験として、「百見は一体に如かず」と言いたいと思っています。僕自身が、博物館に身を置いてまもなくミヤマカラスアゲハという美しいチョウを捕虫網に入れたときの感動を味わったとき、一瞬で理解できることがあると思ったのです。それまでいろいろ頭で考えていた自然というものの理解がその一瞬で吹き飛んでしまい、こんなにも自然は楽しく奥深いものかという発見に喜びました。昆虫採集だけが自然の面白さを知る方法だとは言いませんが、少なくともその有効な方法のひとつであるということはいえるでしょう。押し付けは絶対にはいけないので、虫嫌いな子に昆虫採集を強制してはいけませんが、楽しいことを伝えるのはいいことであると思っています。自然を語りたい人は、ぜひ一度、だまされたと思って昆虫採集をしていただきたいと思います。自然観が変わるかもしれません。

(5) 名和昆虫博物館の建物の歴史的意義(建物は開館当時のもので、洋風2階建(設計:武田五一)。明治洋風建築の貴重な建築物で、登録有形文化財(岐阜県第1号)に登録されている)

隣接の名和記念昆虫館も、1907年(明治40年)に建てられた洋風建築物(設計:武田五一)で、岐阜市指定文化財。

武田五一は、近代建築を代表する建築家で、彼のデザインにほれ込んだ熱狂的なファンさえいるようです。実は、武田五一は名和靖が教諭をしていた時代の教え子でもありました。そのため、附属施設である記念昆虫館、名和昆虫博物館の他、昆虫碑など名和昆虫研究所周辺の建造物、内装などほとんどが武田五一の作品です。どちらの建物も、屋根など一部を除いて、その当時の材料がそのままの形で残っていることを多くの建築家が評価しており、建物の研究目的で見学をされる方も少なくありません。